

弔 辞

宗 田 一

天寿を全うされ神のみもとに旅立たれた三木栄先生に対し、謹んで哀悼の意を捧げます。

三木先生は、東アジアの医学史の中で朝鮮半島の医学史が大きな空白部分である事をつとに悟られておられましたので、大学を卒業され朝鮮半島に職を得られた先生は、現在のソウル、京城帝大での勤務の余暇のすべてを朝鮮医学史の研究に没頭され、この研究を生涯のライフ・ワークとされました。

堺に帰られてから研究成果をまとめられ、敗戦後の出版事情の悪い時期にもめげず、次々と大冊の自家出版本を世に送られました。

しかし出版費用の捻出のため、長年に亘って収集された蔵書を手放されての刊行でありました。そのため旧蔵書のほとんどが散逸してしまった中での唯一の救いは、朝鮮関係医書が纏まって杏雨書屋（武田科学振興財団）に収められ、「三木文庫」として現存し、将来に亘って内外の研究者の利用が可能となっていることでもあります。

先生の研究成果は、すべて韓国・北朝鮮に伝えられ、朝鮮半島の研究者の指針となり糧になっております。そのため朝鮮半島の研究者は、先生を神さまのように尊敬してこられたのであります。

先生は「朝鮮半島の医学に通ぜずして、島国日本や大陸中国医学を説いてはならぬ」と力説されておられました。これは朝鮮半島文化の再認識に通ずる視点で、昨今の日韓文化交流の動きをみるにつけ、先生の卓見がようやく実りつつ

あるのを感じずにはおられません。

また忘れてはならぬことは、先生が戦後間もない頃、スクーターを馳って調査・発掘された伏屋素狄の研究メモ類に関する研究があります。腎機能の実験生理学研究を行った伏屋素狄の評価に当たっては、本日喪主をつとめられる御長男の謙先生と協同で追試実験を実行され、正当な評価を与えられて、『実験医史学』ともいうべき分野でも先鞭をつけられたことでもあります。

さらに先生は、全世界に視野を拡げられ、『大系世界医学史』等の大著も刊行され、東西医学一元論、医倫理、医学本質論を提唱され、余生を「医師の誓詞」の普及に尽したいと、晩年に至るまで医史学の研究に情熱を傾けられました。幅広く奥深い先生の医史学研究を範として、後輩たるわれわれは、一層の努力を怠らぬことを、先生の御霊前にお誓い申し上げます。

平成四年十二月二十二日

〔右の弔辞は、三木先生の告別式（於日本キリスト教団堺川尻教会）において読んだ弔詞に若干の加筆を行ったものである。〕

（京都市）